天童寺世代考（十）

吉田道興

七十二代　無傳宗孚

無傳の伝記史料は、先代の曦庵と同様、現在のところ『寺志』巻三「先覚攷」および補助的な断片記事の巻二「建置攷」・巻七「塔像攷」・巻一「山川攷」しかない。

無傳は、諱を宗孚という。出身は鄞（浙江省東部沿海付近）とされる。しかし、生没年・受業・受業師・参学師、嗣承および法嗣等に関してはまったく不明である。

天童寺入院の時期も手掛かりがない。止住期間は、正統年間〈一四三六～四九〉と記されているが、確実な年号は正統六年〈一四四一〉十一月二十七日、当時の天童寺大衆と力を合わせ洪鐘を鋳造し、「銘」を作ったことが知られるだけである。なお、この年、住僧宗正が鉄鑢二瓶を鋳造している。宗正の素姓も不明であるが、彼は無傳を補佐していた天童寺の有力な役職僧と思われる。これら仏具類の鋳造は、宣徳七年〈一四三二〉の伽藍燬失に伴う復興事業の一環であろうか。その中で前述の如く圓愷による各種伽藍の興建は顕著であったが、この頃、まだ不足な仏具・什物類が相当数残っていたのであろう。

無傳の天童寺退院の時期も不明であるが、退居後、寺域の中峰（太白峰と東谷との間）に隠棲している。既に中峰には、祖師（密庵咸傑）塔があり、塔所の「中峰庵」が存したので、おそらく無傳は、その庵近辺に住んだものと推定できる。『寺志』巻一・巻三によれば、その中峰に退去

していた時期に、当時、「中書舎人」を経て「太僕寺丞」に就いていた金湜（字―本清、号―太瘦生・朽木居士）〈生没年不詳〉が「中峰」に無傳を訪ねていることが知られる。金湜は、無傳と同じ鄞の出身であり、同郷のよしみで親しく談笑に耽ったことであろう。金湜は、かねて書と詩歌に巧みで出世した人物であり、その際、彼が作った「詩」が「山川攷」に所載している。彼の詩集『皇華集』に所収されていたものと推定できる。没年の時期・法臘・世寿も不明であるが、没後、彼の塔は中峰下塔の東谷庵東南の麓に建てられ、「七十二代」と称せられていたとある。その世代数は、墓塔に彫琢されていたものと思われる。現在、「塔銘」の有無は不明、法嗣の守塔者も分からない。

○無傳史料

(1) 『寺志』巻三「先覚攷」［二六六］「無傳孚禅師」。巻七「塔像攷」［五二〇］「無傳孚禅師塔」。巻一「山川攷」［六六］「太僕本清金湜詩」。金湜の史料として『明詩紀事、乞、六』『明畫録、七』がある。金湜の詩は次のとおり。「行盡青松始見山、暖風微雨路斑斑、欲尋開士棲禅處／［尋無傳孚禅師］／直到中峰疊翠間、満地竹陰人跡少、四簷花氣鳥聲間、清茶啜罷悠肰別、不許袈裟送出關」。巻二「建置攷」［一〇五］「敬宗、正統六年」項。

七十五代　大用　機

後述するごとく大用は、「七十五代」とされるので、前記、無傳の後に二人の住持が入る訳であるが、現在のところそれが誰であるかは不明のままである。

大用の伝記史料も乏しく、現在のところ『寺志』巻三「先覚攷」および巻二「建置攷」・巻七「塔像攷」の断片的記事だけであり、本師と嗣承および世代数等が伝えられるのみで生年・出身地・受業・受業師・参学師、さらに天童寺の行業や没年、法臘・世寿等も不明である。また諱の上の一字も分からない。

大用の嗣承は、「無準範九世孫」とあるように無準師範→断橋妙倫→方山文宝→無見先覩→無聞智度→古拙昌俊→無際明悟→壊空成→大用と次第する（臨済宗虎丘派）。なお、法嗣には、月輝明の一人が知られる。彼の行実も他に史料がなく不明である。

大用の天童寺入院と止住時期を大胆に推測するならば、無傳の後、三代目となるので景泰年間〈一四五〇～一四五六〉ないし天順年間〈一四五七～一四六四〉頃まで、また延びても成化年間〈一四六四～一四八七〉の前半となろうか。但し、天童寺入院時の年齢や健康状態によりいくぶん前後することはあり得る。没後、塔は中峰山麓に建てられた。『寺志』編纂当時の嘉慶年間〈一七九六～一八二〇〉の頃と想定されるが、墓塔の傍らに「静菴寧首座二塔」が附されていたと記されているが、彼らは法脈に連なるものか止住時代の門人か分からない。「静菴寧首座」に関しては、『寺志』巻五「雲蹤攷」に「静菴寧禅師」として所載する。それによれば、静菴は諱を「盛寧」、寿昌の鄮峰瑞公〈生没年不詳〉の法嗣とされる。静菴の本師に当たるその瑞公は、大用に関わりがあるとの記述である。大用の「塔銘」の存否も判然としないが、墓塔の一部に「七十五代住持」との表示、またその伝承が天童寺にあったことは確かのようである。

○大用史料

(1) 『寺志』巻三「先覚攷」[二六六～七]「大用機禅師」。巻七「塔像攷」[五二〇]「大用機禅師塔」。巻二「建置攷」[一〇七～八]。「先覚攷」と「建置攷」に大用が「七十五代住持」であったことを記している。なお「建置攷」には宣徳年間〈一四二六～三五〉、大用の時まで「伝法住持制」をしいてきたが、この後中断し、天順八年〈一四六四〉頃から名刹は「十方住持制」を取るようになっていったとの旨が記されている。実際は、古くから洞済両宗をはじめとする名徳が相対的に混在し住持となっている。一時的に伝法関係者が数代続くこともあった。この辺の中国仏教界の事情は、長谷部幽蹊『明清仏教教団史研究』第八章「叢林寺院の性格と実態」第一節「十方叢林と伝法叢林」・第二節「江南五山の伝法叢林化」・第三節「諸法名山大刹の伝法叢林化」に詳しい。『寺志』巻五「雲蹤攷」[三七六～八]「静菴寧禅師」。この文の末尾に「静菴寧禅師塔」の字句に続き「蓋師之衣鉢塔也」とある。「衣鉢」の意味が直接的な「嗣法」なのか、間接的な「伝法（得法）」なのか、現物の「衣鉢」を納めた塔なのか、いまひとつ判明しない。

七十七代　性空　習

大用の後住「天童寺七十六代」住持の僧名は、現在のところまったく分からない。次の住持性空に関する伝記史料もほとんどなく、前述の五人とほぼ同様、『寺志』巻三「先覚攷」・巻七「塔像攷」等の断片記事に依拠するしかない。

「先覚攷」の「決議」に性空の「世譜」（俗世の系譜・出自）は、無際明悟の法嗣・楚山紹琦（天成紹琦とも）〈一四〇三～七三〉に係ると記すので、その親縁筋であるとすれば、蜀（四川省）安唐（成都）の人で雷氏かも知れない（『南宋元明禅林僧宝伝』『五灯会元続略』等の「楚山紹琦」伝）。しかし、この説の根拠がはっきり示されていない点が追求する上で問題である。

同じく「先覚攷」の「決議」には、性空の直接の「伝記」ではないが、次の二人の伝記に参学師として、その名が登場し所載する、という。すなわち性空在世当時のものと思われる『懶牧湛覚禅師伝』と『古音琴禅師伝』との伝記である。懶牧湛覚〈生没年不詳〉については、『寺志』巻五「雲蹤攷」に若干記事が所載する。それによれば、前者の懶牧は長安の張氏の子で、月空師〈生没年不詳〉（嗣承は宝蔵玉の法嗣・月空大であれば同系の臨済宗虎丘派）について出家し「天童性空禅師」に参じ得法すとあり、『松巣内外集』が存すとの旨を記している。文中の「得法」が直ちに「嗣法」を意味するのではなかろう。従って懶牧自身の嗣承は不明であり、かつ現在その伝記の存否も確かめられない。後者の古音琴〈生没年不詳〉については、同じく巻五「雲蹤攷」に所載する。それには諱を「法琴」、号を「玉泉」と称すとある。諱については、多くの灯史類（『五灯全書』巻六十等）でまた「浄琴」とも言う。その嗣承は、前述の大用の法兄弟である光沢恵の法嗣・寿堂松〈生没年不詳〉が本師であり、臨済宗虎丘派に属する。その古音が若い頃、「性空」をはじめとする積徳に参じたと記す。なお、古音は嗣法後、大刹の瑞巌寺に晋住開法し、さらに斗峰寺を開創し、『醍醐味』三巻があるとの旨を述べる。ただし、この古音の伝記に登場する「性空」は、「性空関」であり、「性空習」ではない（『五灯全書』巻六十所載、寿堂松禅師法嗣「建寧府斗峰今古音浄琴禅師」）。よく似た名の「性空聞」（性空無極聞禅師）は、前掲の楚山紹琦の法兄弟の一

人西禅瑞禅師の法嗣である。ちなみにこの「性空無極聞禅師」の伝記には、天童寺に関して何も触れていない。もし、「性空習」がこの「性空聞」と同一人物であれば好都合であるが、いかがなものであろう。「関」と「聞」の字は、門構えが同じなので書写の上で誤って伝えられる可能性も考えられる。しかし、「性空習」の「習」の字と「関」ないし「聞」とが書き誤って伝えられることはまずあるまい。従って現在のところ、『寺志』の編者が言うように「性空習」が「性空聞」と同一人物であるとは断定できない。

性空の天童寺入院・退院の時期、止住期間内の行実・思想等に関して何も手掛かりがない。前住との兼ね合いから、その止住は天順年間〈一四五七～一四六四〉から成化年間〈一四六四～一四八七〉の頃と推定できる程度である。また没年、世寿・法臘、法嗣等も不明である。没後、塔は東谷の宏智禅師塔「妙光」の左傍に建てられた。『寺志』の編者は、その幢石に「八十七代住持」と鐫まれているが「八」は「七」の誤りとし、性空を「七十七代住持」としているのである。現代、その幢石が確認し検討できない以上、今は、この説を踏襲せざるを得ない。

上記の事情から察せられるごとく法嗣についても何ら伝えられていない。

○性空史料

(1) 『寺志』巻三「先覚攷」〔二六七～八〕「性空習禅師」。巻七「塔像攷」〔五二〇〕「性空習禅師塔」。巻五「雲蹤攷」〔三七四～五〕「懶牧湛覚禅師」「古音琴禅師」。両者の直接的な伝記史料が不明であり、「性空習禅師」に結びつかず、性空の存在を証明するものとは言いがたい。しかし、嗣承関係で「臨済宗虎丘派」内の人物の可能性もあるが、塔が「妙光塔」傍に建てられたとすれば、「曹洞宗」系かも知れない。

《住持空白時代》

前掲の性空以後、明の中期から末期の弘治年間〈一四八八～一五〇五〉ないし正徳年間〈一五〇六～一五二一〉・嘉靖年間〈一五二二～一五六六〉・隆慶年間〈一五六七～一五七二〉・万暦年間〈一五七三～一六一九〉の前半までのおよそ百年間は、天童寺の「住持空白時代」と言えよう。実際は「無住」と違い十数人前後の住持がいたのであろう

が、その世代数や住持名は伝えられていない。おそらくは万暦十五年〈一五八七〉七月二十一日の大雨に伴う大洪水で伽藍が流出し、全山が廃墟と化した。土砂に埋まった死傷者・犠牲者も多数でたことであろう。「太白龍見乗風鼓雨、洪水壊山寺、尽址礎礫無一存者」とあるように破壊のほどは激しく「祖師塔」の遺跡等も土砂に埋もれ、それに連れ文書・記録類が逸亡したためなのであろうが、生存者による伝承などがなかったのか、実際のところ住持名不明の原因や背景がよくわからない。そうした不幸な事情がいくつか重なったためなのであろう。

この間、天童寺の事柄が何も知られないわけではない。すでに本稿(1)に触れているとおり『寺志』巻二「建置攷」には、かろうじて嘉靖十四年〈一五三五〉春、鄞隠士の白川居士楊明〈生没年不詳〉により『天童寺集』七巻が編輯され、住僧の隆・昂の二公に付し上梓したこと、更に万暦年間に住僧の無憂万懽〈生没年不詳〉が増編して、それを鷲峰正位〈生没年不詳〉が授けられ上梓したことが記されている。また先の文に続き、嘉靖三十四年〈一五五五〉、山内夾道の松が伐採の憂き目に遭っていることが叙述されている。これは「以日本猝警備艦防海也」というので当時、揚子江下流付近に出没していた「和冦」対策のためであろうが、伐採の具体的な規模やその効果などは述べられていない。

因懐・伝信・慧高

叙述は前後するが、『寺志』巻二「建置攷」下の項に万暦十五年夏の洪水による災害の後、冬に住持僧・因懐〈生没年不詳〉が延請されて入院し、法堂を重建したとある。前掲の被害状況から果たして同じ場所に五か月以内に伽藍が復興できたのかはなはだ疑問である。叢林で最小限必要な法堂を最初に建立したが経費の都合上、仮のもので竣工も翌年になった可能性も考えられる。事実、約五十年後であるが密雲の代になり、その法堂も新築されている。

因懐に関する史料は、『寺志』巻三「先覚攷」には所載されず、「建置攷」に記述があるのみで入院の年月と法堂重建しかわからない。生年・出身地・受業・受業師・参学師、さらに本師・嗣承、没年、法臘・世寿、法嗣等もすべて不明である。

入院後の生活は、天童寺の復興と修行僧の育成に尽くす毎日であったろう。法堂の重建以外にも手を染めて努力したと思われるが、具体的な功業は伝えられていない。止住期間・退院の年月もさだかではない。

次に万暦三十年〈一六〇二〉、住僧・伝僖〈生没年不詳〉が鍾楼を重建したとある。この当時の「住持僧」が誰であったかは判らないが、伝僖が住持並みの功業を挙げているのである。伝僖はその意味で天童寺住持代理（監寺役）を勤めていたといってもよいと思われる。伝僖に関する史料も前掲の因壊と同様に一切不明である。

この時代、間接的ではあるが、天童寺の状況を伝えるものとして紫柏尊者達観真可〈一五三七～一六〇三〉が「感言」した語「四明三仏地、海闊魚龍鯉、天童與雪竇、法鼓久不鳴」（建置攷）がある。この出典は、『紫柏尊者全集（紫柏老人集）』か『紫柏尊者別集』に収録（「続蔵経」所収。「禅宗集成」二三・二四収録）されていると思われるが、捜しあぐねている。（未見の『紫柏老人詩集』三巻に所載か）いつ、どういう状況で漏らした言なのか不明で心もとないのであるが、達観の遷化したのは万暦三十一年であるので、その数年前の天童寺と想定してよかろう。要するに当時の天童寺において久しく法鼓が鳴らない、すなわち住持による説法がされていないというのである。達観にとって往時の盛況を願う天童寺への思いがこもった言句であると云えよう。『寺志』巻二「建置攷」には、前述の伝僖の記事に続いて万暦四十三年〈一六一四〉、住僧・慧高〈生没年不詳〉が僧俗六人と共に江蘇省金陵へ行き、「請印大蔵」すなわち「大蔵経」の印刷を招請したという。当時、金陵には聚宝門内三山街西南廊に経舗があり、所謂「万暦南蔵（南蔵万暦本）」を印刷発行していたことが知られる（『金陵梵刹志』巻四九。長谷部幽蹊『明清仏教研究史料』第一部、明代以降における蔵経の開雕。一〇～一二頁等）。おそらくそれの入手を望んだものと思われ、合わせて修行僧の育成充実を図ったものであろう。「印経」に伴う費用や滞在費も膨大な額になったと推測されるが、それを用立てられる資金が天童寺にあったということを裏づけることになる。なお、この叙述の後に「附紀」として、その収蔵庫を慧高は「宝峰蔵」と号したとあり、その後に慧高が病気で逝去し、次いで同行の三人も殞斃したという悲話を載せている。

この時の「住持僧」も判明しない。

○因懐・伝僖・慧高史料

(1)『寺志』巻二「建置攷」〔一一五～六〕。万暦十五年七月の洪水による被害記事の後、沈明臣の「紀災詩」と龍徳孚の「賑饑経寺詩」を載せ、災害のすさまじさを伝える。その後に因懐による法堂の重建、次に万暦三十年の伝僖による鐘楼の重建と達観真可の「感言」、そして万暦四十三年の慧高の「請印大蔵」並びに「附紀」の記事が所載する。

(2)『紫柏老人集（紫柏尊者全集）』巻四「法語」〔三五三～四〕に滅翁文礼の「三則機縁」を採り上げ拈提している。しかし、この時代、達観が天童寺とその住持と交渉があった記事は見当たらない。

中興　**密雲圓悟**〈一五六六～一六四二〉

密雲は明代末の中国仏教を代表する傑僧の一人である。従って彼に関する『語録』や「伝記」等に関する史料は大変豊富である。

『密雲禅師語録』（崇禎五年、黄端伯撰「序」。弘光元年、明暹蔡撰「序」。山翁道忞・五峰如学等編）十二巻には、止住寺院の「語録」（巻一～三）、自伝の「行繇」（巻六）、王谷撰「行状」・徐之垣撰「全身塔銘」・唐世済撰「衣鉢塔銘（遺衣金粟塔銘）」・韋克振撰「道行碑」・山翁撰「年譜」（巻十二）が収録されている。また宗伯虞山銭謙益撰「天童密雲禅師悟公塔銘（勅賜慧定禅師密雲悟和尚塔）」（『牧斎有学全集』巻三六、『寺志』巻七所収）や山翁撰『明天童密雲和尚行状』（『布水臺集』巻一六所収）の存在が知られている。

更に灯史類には、『五灯会元続略』『五灯厳統』『高僧摘要』『南宋元明禅林僧宝伝』『続灯存稿』『古今捷録』『祖灯大統』『続指月録』『続灯正統』『五灯全書』『南嶽単伝記』『揞黒豆集』『新続高僧伝』『列祖提綱録』等にも所載している。

これらの史料の中から比較的古いもので信用の置けるとみなされるもの、すなわち自伝の半生記「行繇」を元に王谷撰「行状」と山翁撰「年譜」を主に使い、天童寺を中心とした記述内容にしたい。まず略伝を記そう。

僧名の密雲は号、圓悟は諱である。誕生は嘉靖四十五年〈一五六六〉十一月十六日丑時という。常州宜興（江蘇省

常州府宜興県）の出身で俗姓は蔣氏で、父の名を曦、母の姓は潘氏である。六歳で自然に「念仏」をするようになり世間の無常を観じたとある。十五歳で躬ら耕樵し親を養い、十六歳で結婚している。二十六歳で『六祖壇経』を閲覧し始めて宗門向上のことを慕い、二十七歳の時に山に登り作務中に省得することがあった。

二十九歳十二月、出家を決意して妻を離縁し、三十歳正月、顕親寺へ参詣して幻有正伝〈一五四九～一六一四〉を礼し師事した。幻有は「学道勇鋭」と志の「徹悟」とを期して彼に「円悟」と命名したという。この年（万暦二十三年）の春、幻有は、荆渓（江蘇省）の龍池山禹門禅院へ住したので円悟も随従した。三十一歳で薙染し、終身苦行作務することを誓い、三十三歳の年四月八日に「具足戒」を受け僧服を納め正式に「比丘」となる。翌年、三十四歳の時に掩関（禁足）し、千日目に「按を期し」（開悟）している。同年冬、関を啓き、その後に三十五歳・三十六歳と引き続き、幻有と何度か問答応酬するも機縁かなわず、印可証明は得られなかった。

三十七歳（万暦三十年）、幻有が燕都（河北省北京）［燕山普昭寺か、龍池院か］へ移錫し、円悟も随従し監院を務めている。三十八歳秋、師の幻有の下を離れ、銅棺山［江蘇省宜興県か］の頂で豁然大悟し「恍恍惚惚、昭昭霊霊」底の体験をした。四十歳（万暦三十三年）四月、法弟の天隠円修〈一五七五～一六三五〉と共に幻有に省覲するため燕京（北京）へ向かい、十月には普昭寺に到着、「新会処」を提出し問答応酬、ついに相契するに至った。四十二歳の時、師の幻有と法弟の天隠と別れて南下し、金山・龍池山・双径・天目山・天台山を過ぎる。旅の途次、各地で数人の祖師と道交を結ぶと共に海門周居士・陶会稽望齢・王司空舜鼎などの文人とも交渉していることが知られる。

四十三歳、陶会稽家ゆかりの石簣山房・護生庵に居住。四十四歳、武原を過ぎ泰山に留まる。四十五歳、正師幻有が燕京より南来して前任地の竜池山禹門禅院に再住することが決まり、秋に来訪。四十六歳、竜池山を訪ね幻有と会い問答、翌日、幻有は鼓を撾って大衆を集め、円悟に「衣払」を付与している。三年後の万暦四十二年〈一六一四〉二月十二日、幻有が示寂し、円悟は竜池山にて心喪伴柩（服喪）すること三年であった。五十二歳の万暦四十五年〈一

六一七〉四月十五日、正師の喪が明け大衆に請われ、竜池山禹門禅院に開堂。五十七歳、天啓二年〈一六二二〉秋に天台山通玄寺の昇住を請われ出発、九月に紹興（浙江省）吼山護生庵に暫時憩っている時、費隠通容〈一五九三～一六六一〉が参訪して証契している。通玄寺に到着したのは、その年十二月、開堂演法は翌年であった。

五十九歳、天啓四年〈一六二四〉三月、檀越の蔡子穀聯璧に招請されて、四月に嘉興海塩（浙江省）金粟山広慧寺（唐僧会所建の古刹）に赴き、五月六日に入院上堂、十月に結制を施いている。その結制には、破山海明〈一五九七～一六六六〉と漢月法蔵〈一五七三～一六三五〉なども随喜している。彼らは後の法嗣十二人の一員である。

六十四歳、崇禎二年〈一六二九〉八月、黄檗山万福寺の招請があり、九月に竜池山へ帰り本師幻有の塔を掃し、更に姑蘇（江蘇省呉県）登尉山天寿聖恩禅寺に「万峰（時尉）」「宝蔵（普持）」両祖塔や虎丘山の「（紹）隆祖塔」などを掃し、法灯の祖師たちに報恩の誠を尽くしている。黄檗山万福寺の入院は翌年三月二十七日、開堂垂示は四月十五日に行っている。黄檗山の止住はわずか五カ月たらずであった。この年、法嗣の一人漢月法蔵が自著『五宗原』を密雲に寄贈したが、禅宗「五家」に関する内容が後日、師弟と法孫間における意見の衝突を招くことになるが、ここでは叙述を略す。

六十六歳、崇禎四年〈一六三一〉元日、前年十二月に明州司李端伯黄元公等より鄮山（浙江省）阿育王山広利寺への招請を受け、二月三日に入院、同月十五日に開堂演法している。また三月には、天童山景徳寺に赴き「応庵（曇華）」「密庵（咸傑）」両祖師塔を掃している。その際、寺僧の明貫をはじめ、白郡司李公、王邑侯章士、紳李侍御遵、徐侍御之垣、それに檀越の徐有杞などから太白名山（天童山）の昇住要請を受けている。『寺志』巻二「建置攷」の項には、崇禎二年に密雲を迎請しようとしたが、この時は金粟山にあり至らなかったと記されている。それはさておき、阿育王山の止住は約二カ月という短期間である。さらにまた同年四月三日、天童山に入院上堂するも五月に先住地の金粟山広慧寺に「再住」し、八月には天童山に帰還するというように誠に慌ただしい日程と動向であった。阿育王山（初住）・金粟山（再住）の入院は、名目的意味を持つに過ぎ

ないように思われる。こうした寺院の住職を招請されるのは逆に言えば、密雲の人徳に対し僧俗の世評がそれほど高かったと言える。

密雲が天童寺入院の際、古仏殿の基壇に至り次のとおり「仏殿法語」を述べている。

虚空を殿となし、日月を灯となす。且く道へ是れ甚麼人の境界ぞ。還た会すや。

設し或は未だ会せざれば、且く看よ。

入院当初の天童寺における伽藍の様子は、この仏殿に代表されるであろう。

六十七歳、崇禎五年〈「壬申」一六三二〉の年には、『壬申纂天童寺志』（通称「壬申志」）五巻が編纂されている。拙稿の(1)にも触れたことであるが、この『寺志』の編集出版の関係者は、次のとおりである。咨謀者（企画人）張客卿［元岾か、廷賓か］、草創者（起草人）僧白山、討潤者（検証者）王金、侵伝者（出版発行人）陳紀である。更に勤令蘭陵芳洲王章の「序」文が現存（『寺志』巻二「建置攷」所載）していることが知られる。密雲が赴任して二年目であるが、荒廃した状況を見て、さぞかし復興の意欲を燃やしその準備に邁進したことであろう。

赴任当初、天童寺の荘産（荘田・地産）は往時と比べ著しく減少していた様子である。『寺志』巻九「轄麗攷」の附「荘産」には、相伝の寺田はあまた合計すると二千六十畝、洪武年間〈一三六八～九八〉の応役は鹽丁六十三名・余丁十九名いたとあるが、密雲の入院当時は田はなく山もほとんど売りつくしわずか十二（畝）となっていたようである。

崇禎六年〈一六三三〉、密雲の六十八歳春正月、前掲の記事に続く会稽陳樹勣〈伝記・生没年不詳〉の識す文には、寺の山場（山地ないし山中で茶税を徴収するところ）の管轄として密雲が住持の法席を掌って以来、天童寺旧住の正鑑・円智・智広・真修・明貫などがその山場をもって推帰（極致に到達、利益を獲得）して常住、清関橋より円環をめぐらし玲瓏巌に至る七百三十畝を有し、更に清関橋の外の山三畝・新庵の後山の四十六畝と基地・玲瓏巌の右側の山三畝・窖房基の後ろ三畝・責罰塘の岸十二畝・幻智庵は山と基地との若干畝・小白下院の基地六畝八分・柴山の七畝三分をそれぞれ贖い買い、南山塔院に山田若干畝・東谷

庵内や各所には後にそれを置いたことなどが記されている。彼らが密雲を援助して復興に尽力したことが、これ等の記事により伺える。同年四月には大雄宝殿の西偏に「通堂」（九楹、深さ六十尺、延袤＝〔縦横の広さ〕百四十尺）を建立、諸堂の建材搬入には閩（台湾）へ僧三十人を遣わしている。翌年春にも方丈後山の麓や善法堂の西偏に「諸寮」（十九楹）などを建立、また鉢盂峰下に「外万工池」（通計千三百五十尺）を掘削し、周囲に巨石を用い墨砌している。続いて崇禎八年秋には、元の殿址に「天人師殿」〔いわゆる仏殿〕（高さ百尺、縦の広さ前と同じ）を建立、また九楹の殿堂を演法のために建立〔法堂〕（高さ六十尺、広さは百三十尺、縦は九十九尺で以前と比較しその十（一割か）を相殺して建てたという）。なお『寺志』巻二「建置攷」の項（崇禎八年）には、密雲が始め仏殿と天王殿とを建て、法堂・先覚堂・蔵閣・大方丈を次々と落成させたとの旨を述べ、「正疏」には仏殿に関して、七間、高さ九丈六尺、縦十一丈、広さ十三丈五尺と記され、仏殿の東脇に「伽藍堂」・西脇に「祖師室」（各々三楹）があるとしている。法堂に関しては、その間と広さは仏殿と同じであるとし、両偏にある各一楹の六丈六尺はその高さ、八丈六尺はその縦であると記している。また『年譜』には、前文に続いて「善法堂」西廡の右に仏菩薩の語を蔵する閣〔蔵経楼・蔵閣〕を建立、高さ五十六尺、広さは殿の縦と同じ、縦は殿の三十尺を相殺し、これらは皆同時に建立したと記す。更に同年冬には、元の「朝元宝閣」の場所に「護世四神王殿」〔いわゆる天王殿〕を復建、その前に建つ「天人師殿（仏殿）」と相い雄峙し、その「高深壮麗」さを傑立させていたとある。なお「天王殿」の規模は、先の『寺志』に間と広さは仏殿と同じで、高さは八丈六尺、縦九十尺とある。次に『年譜』には、境内の奥と思われる位置に「寝堂」十三楹（中央の五楹は「丈室（大方丈）」、西側の五楹は「楼」「燕閑」、東側の三楹は「開山と歴住者の位号」を奉祀する堂〔先覚堂〕）を建立、間もなく「天供厨」「庫院・厨房」なども落成している。「寝堂」に関連する建造物の『寺志』の叙述は、次のとおり。「先覚堂」は三間、高さ三丈、縦五丈、広さ六丈とあり、左側に楼二間の「司香蔵閣」があり、およそ七間、高さ四丈六尺、縦七尺、広さ十一丈という規模。大方丈は、三間、両偏に各一間があり、高さ三丈六尺、縦六

丈六尺、広さ八丈二尺などと記されている。以上、諸種の伽藍に関し『年譜』と『寺志』との数字上の相違が多数見られる。これは、明代と清代の度量衡（尺貫法）による相違なのかどうか、はっきりしない。参考までに現代のメートル法で記すと明代の一尺は三十一・一センチ。これに対し清代の一尺は三十二センチ。明代の一丈は三メートル十一センチ、清代の一丈は三メートル二十センチである。今は両書の記述を詮索せずに、そのまま並べ置くことにしたい。

七十一歳、崇禎九年〈一六三六〉には、境内の東側左端から順次、九楹・十四楹と廊が修築され、また西側の「法宝蔵」と「天供厨」との間に「堂司（楼）」と「庫司（楼）」との二司、更に「護世四神王殿」「天王殿」の右に覆屋（四周、通し二十楹）を建て、涅槃・病僧の居処「延寿堂」とした旨、更にこの堂の寄進者である銭廷尉士貴にまつわる逸話について触れている。『寺志』巻二「建置攷」の項（崇禎九年）には、まず仏殿の東偏に「雲水堂」、その西偏に「応供堂」が建てられ、「正疏」に両方とも七間、左右に各一間と記され、続いてこの年、「延寿堂」が天王殿外の西に建てられたとあり、「正疏」に堂の規模を二十間とし、同じく嘉禾銭大理士貴の寄進逸話を述べている。

翌年（崇禎十年）七十二歳、「先覚堂」の碑文を制作、皋亭（浙江省坑県）の「真歇禅師塔院興修偈」を制作、十二月に初住の荆渓（江蘇省）竜池山禹門禅院よりの招請あるも退けている。この年、「寝堂」の前に「先覚司香室」を建てている。この年までの建造物の集計として、楼では十三楹、室では四十四楹、明堂では前後左右に五、伽藍祖師（堂）の類は殿の左右に翼を備えるなど数えられないほどという。なお『寺志』の該当箇所（崇禎十年の項）には、「西禅堂」と「東西両客堂」を建てたとあり、その位置や規模につき、まず「禅堂」は「蔵閣」の前にありおよそ七間、高さ四丈六尺、縦六丈六尺、広さ十一丈、中に聖僧像を安置していると記す。次に「東客堂」は、「先覚堂」の垣南にあり、十七間、「西客堂」は、「小方丈」の垣南にあり十八間とある。

七十四歳、崇禎十二年〈一六三九〉正月には、かねて大洪水で毀壊していた「天童列祖塔」を修築している。翌年正月には、雪竇山の招請を再び却けている（以前、崇禎元

年冬にもあり再三断っている）。この年、『寺志』「建置攷」には、「東禅堂」と「鍾楼」が建てられ、この他に堂は、「新新閣」「廻光楼」「返照（楼）」があったと記す。その位置と規模については、「正疏」に次のとおり。「東禅堂」は、「廻光閣（ママ）」の東にあり、およそ七間、両偏に各一間、高広は西制に溢れ、中に「初祖（達磨）像」を置いていた。「鍾楼」は「仏殿」の東廊外にあり、高さは「天王殿」と等しく対峙していた。「新新堂（ママ）」は、「東禅堂」の後にあり、二十二間。「廻光閣（ママ）」は、「天王殿」の東に踞然として建ち、その西に「返照楼」が建ち、各七間、高さは五丈六尺、と記されている。

崇禎十三年まで、密雲が天童寺に入院してからおよそ十年、右の正宇の建造物のほか、付随的なものに東西両廊・香積厨・浴室、更に庫司楼・西客楼・薬料楼、また首座寮・頭首寮・知客寮・化主寮・典座寮・雑務寮・什物寮・浣濯寮、そして碓房・磨房・茶房・小菜房・収飯房・磑房・田房・園房・柴房・頭口房・圃房が次々と建ち、諸種の施設器具類も整備されたのである。これらの伽藍の位置や規模は、『寺志』巻二「建置攷」の「正疏」に次のように記されている。東西両廊は、下から上に各々長さ五十五丈。香積厨は、およそ七間。什物の銅鍋には二十余石が入るものと、数石入るものとがあり、それは僧深密〈伝記・生没年不詳〉が金陵から募鋳したもの。浴室は、澗西にあり、およそ四間。庫司楼は、「西禅堂」の垣外にあり、七間。西客楼は、「庫楼」の垣西にあり、閣は三で両偏に各一を有す。薬〔料〕楼は、西客楼の右にあり、二間。単寮（首座寮か）は、およそ十九間、「方丈」の後ろにある。頭首寮は、およそ十間、「大方丈」の前にある。知客寮は、およそ三間、両偏に各々一間、「仏殿」の西廡にあり、東廡の首座寮と相対している。化主寮は、知客〔寮〕の如く制せられ、「法堂」の東廡にある。典座寮は、およそ三間、香積厨の左偏にある。雑務寮は、計三間、両偏に各々一間、「法堂」の東偏にある。什物・浣濯の二寮は、各々二間、一は知客寮の右に、一は化主寮の左にある。「法堂」が落成し西偏に三間、左右偏に各々一は碓房、典座寮と対す、三間は磨房。碓房が落成し左に二間の茶房、小菜房傍の薬〔料〕楼と対す。二間は収飯房、磑房はおよそ三間、田房は二間、園房は三間、柴房・頭口房・圃房は各々四間、共に西澗浜

に臨んである、と記す。次に同じく「正疏」に西澗橋に接して土石をさらい、内外の「万工池」を築き、「七塔」が造立されていることが述べられている。

これら天童寺の伽藍整備をなした密雲の中興としての事業は、江陰黄介子毓祺の撰述による「天童寺中興碑記」や後日（康熙二十五年〈一六八六〉）、司農蜀遂李仙根の撰述により「重興寺記略」にまとめ記されている（いずれも『寺志』巻二「建置攷」所収）。

七十六歳、崇禎十四年〈一六四一〉には、江陰黄介子毓祺によって『重纂天童寺志』十巻が編纂されている。これは、九年前編纂の『壬申志』五巻を「蓋藍本」（原本）として増広改編したものである。この年八月、南都（南京）大報恩寺の招請を辞退し、続いて邁力の衰えを感じ天童寺の退居の志を抱き、僧俗の慰留を退け遂に九月退院している。『寺志』巻四「盛典攷」には、この年、懐宗皇帝より紫衣一襲を賜っていると記されているが、年代からいって毅宗皇帝〈在位一六二七～一六四四〉である。

翌崇禎十五年正月二十四日、先住地である天台山通玄寺に至る。同年七月三日に微疾を示し、七日に方丈において半跏趺座を組み奄然として示寂した。世寿七十七、僧臘四十四（史料により「四十七」、「四十八」の説あり。これは受業の年月をいつに置くかの相違である）。この月、天童山と天台山との両所に塔廟を建てることに決し、九月になって太白（天童）山より勤旧六十余人が柩を天童山へ帰し、塔を南山幻智庵の右隴に建てた。

没後、密雲の昇住寺院である禹門・通玄・黄檗・金粟・育王・天童における「語録」が集められ、明暹蔡や五峰如学などにより編輯されて十二巻として刊行（弘光元年序刊）、やがて「入蔵」されていった。

剃度の弟子三百余人、嗣法の弟子として次の十二人が知られる。五峰如学〈一五八五～一六三三〉、漢月法蔵〈一五七三～一六三五〉、破山海明〈一五九三～一六六六〉、費隠通容〈一五九三～一六六一〉、石車通乗〈一五九三～一六三八〉、朝宗通忍〈一六〇四～一六四八〉、万如通微〈一五九四～一六五七〉、木陳道忞〈一五九六～一六七四〉、石奇通雲〈一五九四～一六六三〉、牧雲通門〈一五九九～一六七一〉、浮石通賢〈一五九三～一六六七〉、林野通奇〈一五九五～一六五二〉。この中、天童寺の世代住職になった

のは、順に木陳道忞（再住）、費隠通容、林野通奇、牧雲通門、浮石通賢（再住）であり、その後も彼らの法孫が止住している。密雲が天童寺に入院した崇禎四年に彼が「十方住持（十方叢林）制」を標榜したはずであるが、結果的に児孫たちにその遺志は伝承されず、「伝法叢林」へと移行しつつあった。それが果たしてよかったかは別といえる。

○密雲史料

(1)『密雲禅師語録』十二巻［中華大蔵経第二輯十九冊一五八。藍吉富編「禅宗全書」語録部（一七）所収（原本「嘉興蔵本」）］順治二年序刊、黄端伯序〈崇禎五年〉・祭聯璧序〈順治二年〉。巻六には密雲の五十二歳迄の自伝「行繇」、巻十二の付録には王谷撰「行状」・徐之垣撰「全身塔銘」〈崇禎十七年〉・唐世済撰「遺衣金粟塔銘」〈崇禎十六年〉・韋克振撰「道行碑」〈順治五年〉・唐元竑重訂「天童密雲禅師年譜」（通容序〈崇禎十七〉）以上伝記史料。

本語録には、巻一に「住直隷常州龍池山禹門禅院語録」「浙江台州天台山通玄禅寺語録」、巻二に「浙江嘉興金粟山広慧禅寺語録」「福建福州黄檗万福禅寺語録」、巻三に「浙江寧波鄮山育王山広利禅寺語録」「再住嘉興金粟山広慧禅寺語録」「浙江寧波天童山景徳禅寺語録」の昇住寺院の語録集、巻四以下に「上堂開示」「小参」「晩参」や「問答機縁」「法語」「書問」「拈古」「頌古」「偈」等が豊富に所載する。いわば密雲研究の基本史料集である。

(2)『天童密雲禅師悟公塔銘』［牧斎有学集巻三六。『寺志』巻七「塔像攷」所収（勅賜慧定禅師密雲悟公塔銘）］宗伯虞謙益撰

(3)『明天童密雲和尚行状』［布水臺集巻十六所収］木陳道忞撰

(4)『五灯会元続略』巻八［続蔵一三八－五〇一c～三c］「寧波府天童円悟禅師」「臘四十七」の説。

(5)『五灯厳統』巻二四［続蔵一三九－五〇八c～九d］「寧波府天童円悟禅師」

(6)『高僧摘要』巻一［続蔵一四八－三四五d～六b］「釈円悟号密雲」

(7)『南宋元明禅林僧宝伝』巻十五［続蔵一三七－三八〇d～一c］「天童密雲悟禅師」

(8)『続灯存稿』巻一〇［続蔵一四五－一二一a～一b］「天童円悟禅師」

(9)『古今捷録』［続蔵一四六－四四四b～c］「第三十四世天童密雲悟禅師」

(10)『祖灯大統』巻九四［禅宗全書史伝部、二一―一〇九～一一二］「寧波府天童密雲円悟禅師」

(11)『続指月録』巻十八［続蔵一四三―四九六a～八a］「寧波天童密雲悟禅師」

(12)『続灯正統』巻三一［続蔵一四四―四二三d～五a］「寧波府天童密雲円悟禅師」

(13)『五灯全書』巻六四［続蔵一四一―一八五b～七d］「明州天童密雲悟禅師」

(14)『南嶽単伝記』［続蔵一四六―四七三d～四d］「第六十七祖明州天童密雲円悟禅師」

(15)『揞黒豆集』巻五［続蔵一四五―四五七a～四六二d］「天童密雲禅師」

(16)『仏祖正宗道影』巻二―四六

(17)『寺志』巻一「山川攷」［三七］「円悟偈」（太白山頂）・［五五］「円悟偈」（西澗流）・［六一］「円悟偈」（万松関）の各詩偈。巻三「先覚攷」［二六八～二七一］「密雲悟禅師」（要伝）。巻四「盛典攷」［三〇三］明崇禎十四年、懐宗皇帝より「紫衣一襲」を賜る。同［三一〇］順治十七年、「密雲円悟禅師像」一軸を賜る。同［三一三］順治十七年、「円悟密雲禅師語録」十二巻、大蔵に入る。これらは山翁の尽力があった。巻七「塔像攷」［五二二～八］「勅賜慧定禅師密雲和尚塔」（宗伯呉山銭謙益銘序）、［五二八～五四〇］「慧定禅師密雲和尚塔」（督学心韋徐之垣撰銘序）。巻八下「表貽攷」［五七九］「天隠修禅師和密雲兄偈」、［五八一］「潭貞黙謁密雲和尚偈」、［五八二］「劉志斌題獅子柏呈密雲和上偈」・「司理海岸黄端伯（撰）密雲禅師語録序」、［五八七～九］「赤若馮元奮（撰）天童寺志序」、［五八九～五九二］「広文客卿張廷賓（撰）両入天童記」、［五九二～三］「広文易菴姜銓（撰）壬申志序」、［五九三］「侍御方震孺呈密和尚偈」、［五九三～七］郡伯子寅韋克振（撰）「密雲和尚道行碑詞」。最後の「道行碑」は上記(1)にも既に掲げてあるもの。巻九「轄麗攷」［六九〇］「密雲悟題額偈」（攔路菴）。［六九五～八］「（天童寺）荘産（崇禎四年～六年）」。これは、密雲在住当時の地産の概況が伺える記事であり、本文に若干触れた。巻十「附余攷」［七一五］「密雲悟禅師天童中峰庵仏果応庵両祖語偈碑跋」。

(18)『新続高僧伝』「習禅篇第三」巻二一［①台湾台北市、善導寺佛経流通所・琉璃経房発行。二b～三b。②「禅宗全書」五二―七一〇～二］「明四明天童寺沙門釈円悟伝」

(19)『列祖提綱録』巻二十二［続蔵一一二―二六一～二］。この箇所には、天童寺入院の「仏殿法語」「土地堂拈香」とが所

載する。他の箇所にも多数あり。

(20) 忽滑谷快天著『禅学思想史』下巻「第二十六章――密雲円悟と費隠通容」（再刊本、名著刊行会、昭和四四年）

(21) 陳垣撰『清初僧諍記』に禅門諸宗派における伝灯諸祖の序列や配次の先後等について問題点を触れる中で費隠通容撰『五灯厳統』に対する批判等をまとめ、「附録四、明清間僧諍年表」の箇所等にも密雲没後の法孫間の争いについて、若干の記事が含まれている。

(22) 石井修道著「明末清初の天童山と密雲円悟」（駒沢大学仏教学部論集第六号、所収。昭和五〇年）

(23) 長谷部幽蹊著『明清仏教教団史研究』「第八章、叢林寺院の性格と実態。第二節、江南五山の伝法叢林化。第三節、諸方名山大刹の伝法叢林化。第十二章、禅門伝灯の統合と分化」以上の天童寺及び密雲に関する叙述。（同朋舎出版。一九九三年〈平成五年〉）。同著『明清仏教研究資料』「明清仏教文献著者別小目録」密雲円悟の項。

山翁道忞〈一五九六～一六七四〉

密雲が示寂し後席を継ぎ天童寺の住持となったのは、十二人の法嗣の中でも比較的若い山翁であった。年代から言えば、八番目である。なお、後継者候補としては、師の密雲より先に寂した五峰と漢月（漢月と密雲は前述のとおり生前に意見の衝突があった）は除くとして、おそらく密雲の侍者を長く務め、彼の示寂を見届けたことなど実直な人柄から年齢を越えて山内外の信用を得て招請されたものと思われる。またその当時、先輩格の僧たちがいずれも何らかの事情で、すぐに天童寺へ昇住できない状態であったかもしれない。

ところで山翁が天童山へ昇住したことに伴い法兄弟間で争いが生じたことも伝えられている。事実の有無や実態はさておき、法兄にあたる費隠通容〈一五九三～一六六一〉が法嗣隠元編『費隠禅師別集』の中で山翁が機心を以て謀計を廻らし天童山に住したとの旨を記す。また後年のことであるが、陳垣撰『清初僧諍記』に拠れば密雲の生前ないし寂後に法系の師弟や法兄弟の間で各種の「闘諍」（主に嗣承問題）があったことが知られる。それらは必ずしも山翁が起因しているとは思われないが、山翁の昇住は、法孫の総意を得たとはいいがたく必ずしも円滑に進んだもので

はなかったことが伺える。

山翁に関する伝記史料は、『語録』（『天童弘覚忞禅師語録』『弘覚忞禅師北遊集』『弘覚忞禅師奏対録』等）をはじめ、撰述書『布水臺集』三十二巻や『五灯会元続略』などの灯史類に見られるが、先代の密雲のようなしかるべき人物の撰述した「塔銘」（伝記）類は、あっても不思議ではないが、現在のところ見つかっていない。なお、当時の主要な禅僧の史料として『宗統編年』［続蔵一四七］は、彼らの行実について、その年月等が記述されているので部分的に使用できる。山翁は、粤（広東省）潮州茶陽の出身、俗姓は林氏、字は木陳。幼児期より沈着剛毅な性格で生来の知恵があり、書は一目で五行の文を読み下したという。児童期には藝文で故郷の住民間ではその名をほしいままにしたという。試しに「弟子員」（故郷のある教育機関に入ったのか）となったが、性向は世塵に染まらず、時に飄然と塵外（出世間）の想を抱いていたとある。二十歳ころ、『大慧語録』を読み、たちまち自分の前身は雲水で諸方への参学歴訪する者であったとの自覚に立ち出家の志を抱き、即日匡廬（江西省廬山）へ赴き、開先寺の若昧明〈生没年不詳〉法師に従い薙染した。明法師は、山翁が禅宗を思慕していることを察し「臺山婆子話」を挙げると遂に言下に趙州の意旨を薦得したという。山翁は、後年、賛「受業開先若昧和尚」を作っている（『布水臺集』巻十八所収）。しかし、自分自身、生死関頭の辺はまだ破っていないとの実感から、憨山徳清〈一五四六～一六二三〉等の諸方の尊宿達を参訪し相見するも遂に自ら肯んずる事がなかった。後に嘉興（浙江省）金粟山広慧寺の密雲円悟の下へ赴くが、当初は機縁かなわず、数度の参訪と問答・打擲により服膺することになった。密雲の広慧寺における止住期間は、天啓四年から崇禎二年〈一六二四～九〉までなので、山翁の帰投はこの間である。侍司寮に居住し、「記室」の役を掌っている。すなわち侍者として密雲の言動をつぶさに記録することになったわけである。親炙すること十四年、玄奥に達し嗣法した。おそらく崇禎九年ないし十四年ころの間であろうと推測できる。

叙述は前後するが、山翁の編集した『禅灯世譜』九巻は崇禎四年〈一六二六〉冬至の頃に上梓し、「明匡山黄巌寺後学比丘道忞編修」と記しているので、その当時は匡山（江

西省廬山）黄巖寺に在住していたことが知られる。正式な住職であったかどうか、前後どのくらい滞在したのか等は不明である。ちなみに彼の自著『布水臺集』各巻の署名にも「住明州天童寺匡廬黄巖沙門道忞著」とあり、巻一に「黄巖山居即景十六絶」が所載する。なお、『禅灯世譜』の系譜上の問題点に関しては本稿では触れない。要するに師密雲に親炙十四年といっても常に随従していたわけではないことが判明する。

本師密雲の没後一年、崇禎十六年〈一六四三〉二月一日に檀越の請を受け、十五日に「開堂演法」して正式に天童山の住持となり、その席を継いでいる。山翁、四十七歳。

崇禎十七年三月、毅宗が崩去し崑山（江蘇省）安禅院にて「薦巌」を啓建して「毅宗烈皇帝道場疏」を呈している。毅宗は、山翁の初住時代の有力な外護者・理解者であったのであろうか。その辺は不明である。『布水臺集』巻一には、「毅宗烈皇帝哀詞」が掲載されている。

順治三年〈一六四六〉秋、天童山を退院して、明州慈谿（浙江省北部。鄞県の西北部）五磊山霊峰寺に転住している。天童山の後住は、兄弟子の費隠通容〈一五九三～一六六一〉、当時五十四歳である。有名な隠元隆琦の師匠である費隠に関しては後述するので、ここでは略する。山翁の天童山初住時代に関する「語録」は三巻存し、その思想面はある程度把握できるが、行実や事業等は止住が約三年間ということもあり、詳しい記録がなく不明である。山翁は、天童山退院後、五磊山霊峰寺、更に続いて越州（浙江省）雲門寺へ転住している。両寺の止住は「語録」の収載する上堂語の数から極めて短期間であった事が推測できる。次の転住地の時期から両寺合わせて約一年であり、おそらく半年前後ずつであろう。霊峰寺と雲門寺との行実や入退院の年月も具体的には不明である。

台州府（浙江省）寧海県広潤寺への昇住は順治四年〈一六四七〉であり、約二年の止住期間を経て、順治六年十月十五日、越州大能仁寺に開堂演法している。この大能仁寺の地祉が不明である。径山能仁万寿寺ではないと思われる。この「能仁寺語録」の中ほどに「受径山能仁万寿禅寺請拈護法当山疏」の示衆が載っているからである。なお、同年秋、費隠が天童山を退院。翌年五月三日、林野通奇〈一五九五～一六五二〉が天童山に入院している。彼らについて

は、また後述する。

一方、山翁は順治八年〈一六五一〉二月二十一日、湖州（浙江省）呉興道場山護聖万寿寺に開堂演法し止住している。道場山は十刹のひとつである。道場山における山翁の行実もあまり分からないが、『布水臺集』十七巻には「道場山募建法堂疏」があるので、法堂の建立を企画していたことが知られる。しかし、法堂の竣工をはじめ、その他の行実や止住期間等は不明である。「語録」の分量からは、せいぜい一年前後ないし二年以内と推定されるが実際のところは判明しない。次の昇住地は、山東省青州府大覚寺（『寺志』巻三「先覚攷」には「法慶」寺とある）であるが、この大覚寺の入院開堂の時期も不明である。これも「語録」の分量から比較し道場山よりも二倍前後は長く止住していたように推測される。山翁の天童山への再住は、順治十四年である。その間の天童山住職の変遷を概観しておこう。

順治九年〈一六五二〉三月二十九日（『寺志』巻三「先覚攷」には、三月二十六日）、林野が病気のため示寂している。二年弱の止住。同年冬、牧雲通門〈一五九九～一六七一〉が入院し、順治十一年〈一六五四〉に退院。約二年間の止住。同年、浮石通賢〈一五九三～一六六七〉が入院し、順治十四年〈一六五七〉退院。三年間の止住。先の費隠に続き、林野・牧雲・浮石の四人は、二年ないし三年の止住であり、比較的短い。彼等の伝記や行実などは、これも次回に後述する。

順治十四年、山翁は十四年ぶりの天童寺再住であり、六十一歳になっていた。二年後の順治十六年〈一六五九〉三月、世祖〈在位、一六四四～六〇〉は僧録司右闡教の任にあった法璽を遣わし、山翁を北京に勅召、斎宮に留住させ万善殿・愍忠殿・広済殿の三処に結冬（安禅結制）させている。これより山翁は、しばらく世祖の恩遇を蒙ることになる。具体的には同年十月十五日、世祖の旨を奉じ大内の万善殿に開堂結冬している。続いて順治十七年四月、山翁に「弘覚禅師」（「宏覚禅師」『宗統編年』巻三十二）の号、同時に「弘法寺」の寺号、「銀印一顆」も下賜されたようである。『寺志』巻四「盛典攷」には、順治十六年・十七年の二年間に「三衣一襲、黄衣一襲、緑線雲段道袍一襲」をはじめ、「七衣一襲、沈香色道袍一襲、白短衣一領、勒襪一副」など、季節ごとに「賜衣」が下賜されている。

順治十七年四月、それまで何度も告暇を願い出ていたのが許され、五月に天童山へ帰山している。なお、世祖は山翁の法嗣で随侍していた旅庵本月〈生没年不詳〉と山暁本晳〈一六二〇～八六〉の二人を留まらせ、善果寺・隆安寺の大刹に開法させ、あたかも山翁の後を埋めるかのような措置を講じている。山暁は、後年、天童山へ昇住している。

大内万善殿における「上堂語」、世祖との対論等は、門人の真樸の編集『天童弘覚忞禅師北遊集』巻一「住大内万善殿語録」、巻二「奏対機縁」、巻三「奏対別記上」・巻四「奏対別記下」にまとめられている。山翁が世祖と接し、心を砕いて努力したのは、本師の『密雲禅師語録』を献上し、入蔵することであった。前掲の『北遊集』の「奏対別記」上下には、断片的に関連する文章がある。直接的には、『布水臺集』巻十七「進天童密雲禅師語録奏章」（『寺志』巻四「盛典攷」）等により、順治十七年三月下旬に密雲の『語録』十二巻が入蔵を遂げたことが知られる。

帰山した山翁は、推定するに本師密雲への報恩の一端を示し得たとの安堵感を抱いていたであろう。年が明けて順治十八年三月二十九日（『寺志』巻三「先覚攷」には「二月十九日」）、兄弟子の費隠が石門の福厳寺にて寂している。これに呼応するかのように山翁は、同年六月七月に天童山を退院し、法嗣の遠庵本儼〈一六二一～八三〉に継住させている。退院後の行実は、はっきりしないが『寺志』の記述では、本師密雲ゆかりの金粟山広慧寺へ赴き、諸種の伽藍営建に尽くしたようである。

その後、最晩年は、会稽（浙江省）平陽（化鹿山の陽明洞天＝伝灯寺）にて過ごし、「夢隠道人」と称している。康熙十三年〈一六七四〉六月二十七日、示寂している。世寿七十九。法臘は不明。荼毘したが、頂骨は五彩を放ち、歯は損痕がなかったと伝える。それらは平陽の黄龍峰下に自制の「塔銘」と共に納められた。天童山には、「弘覚国師寿蔵衣鉢塔」が玲瓏巌下に建てられ、「爪髪」等が納められた。

法嗣には、遠庵本儼・山暁本晳・天嶽本晝・旅庵本月・大咸本咸・霊遠　応・達変顕権・古田達元・大淵本瀰・天岸本昇・采商本栄・蛤庵本圜・神山本瀛・損巌本堅・放庵本雲・曠圓本果・祥光本吉・博凡潜可・巨霊自融・節巌琇・伊阬　哲・芥庵　琛・息庵　冲・雪叟　住・友山　石

などが知られる。門人も多数いるが、その代表格として『弘覚禅師北遊集』六巻を編纂した真樸を挙げておくことにする。

○山翁史料

(1)『天童弘覚禅師語録』二十巻〔嘉興大蔵経二六―一九五～二八五（径山蔵版―新文豊出版公司）。中華蔵経―第二輯、五一冊一七九。禅宗全書六四―語録部二九〕。『弘覚禅師北遊集』六巻〔同上〕（『弘覚忞禅師奏対録』三巻〔上記、北遊集の巻二・三・四〕〔駒沢大学図書館所蔵〕）、『西巌隠集』五巻〔京都大学所蔵―禅苑清規総要（写本）〕、『禅灯世譜』九巻〔続蔵一四七―二五七～二三三〕・〔駒沢大学図書館所蔵〕。『禅灯世譜序』（黄端伯撰）は『寺志』巻八に所収。『布水臺集』三二巻〔中華蔵経―第二輯、五一冊一八一。二〇巻本―静嘉堂文庫・岸澤文庫所蔵〕。『五宗闡』一巻〔三峰清涼寺志巻一八〕⇓長谷部幽蹊先生指摘〔明清仏教研究資料―文献之部、三四七頁〕

(2)『五灯会元続略』巻八〔続蔵一三八―五〇九b～五一〇b〕「寧波府天童寺山翁道忞禅師」

(3)『五灯厳統』巻二四〔続蔵一三九―五一五b～六a〕「湖州府道場木陳道忞禅師」

(4)『高僧摘要』巻二〔続蔵一四八―三六五d〕「釈道忞号木陳」

(5)『続指月録』巻一九〔続蔵一四三―五〇七b～八a〕「寧波天童山木陳道忞禅師」

(6)『続灯正統』巻三三〔続蔵一四四―四三四a～五c〕「寧波府天童山翁道忞禅師」

(7)『五灯全書』巻六六〔続蔵一四一―二〇三b～五c〕「寧波府天童山翁道忞禅師」

(8)『寺志』巻三「先覚攷」〔二七一～三〕「山翁忞禅師」（略伝）。同巻四「盛典攷」〔三〇三～四〕順治十六年十月、「三衣一襲、黄衣一襲、緑線雲段道袍一襲」を賜る。また翌十七年春にも「七衣一襲、沈香色道袍一襲、白短衣一領、勒襪一副」、夏には「三衣一襲、宮繡道袍一襲」、更に冬にも「千鉞一襲、五衣七衣各一襲、黄祖衣一襲、夾衣一領」を下賜されたことを記している。これらは、清の世祖〈在位、一六四三～六一〉代の山翁再住時代のものである。同巻七「塔像攷」〔四六四～六〕「開山義興祖師塔銘序」・同〔四六六〕「懐開山興禅師詩」・同〔四六六〕「義興祖師像賛」・〔四八一〕「宏智禅師賛」。〔五四〇～一〕「弘覚国師寿蔵衣鉢塔」・〔五四一〕「崑山張立廉作寿塔銘序」・〔五四一～三〕「後興会稽県之化鹿山伝灯寺

建蔵真骨塔于黄龍峰下自著銘序」・「五四三」「黄毓祺題像賛」

(9) 『掊黒豆集』巻六「続蔵一四五―四八二c～四d」「寧波天童山翁道忞禅師」

(10) 『新続高僧伝』「習禅篇第三」巻二二「①台湾台北市、善導寺佛経流通所・琉璃経房発行。一七六～七。②「禅宗全書」五二―七三七～八」「清四明天童寺沙門釈道忞伝」